

堅田の地は11世紀後半、京都の下鴨社の御厨となり、同時に供物を納める供御人として琵琶湖上における自由な通行を認められ、様々な特権を行使することができました。

平安時代末期には「延暦寺横川楞嚴院領堅田庄」となり、山門（延暦寺）の圧力を受けますが、湖上特権が下鴨社を背景としているため、以後も両者との関係を維持し続けました。

中世の堅田衆には、2つの

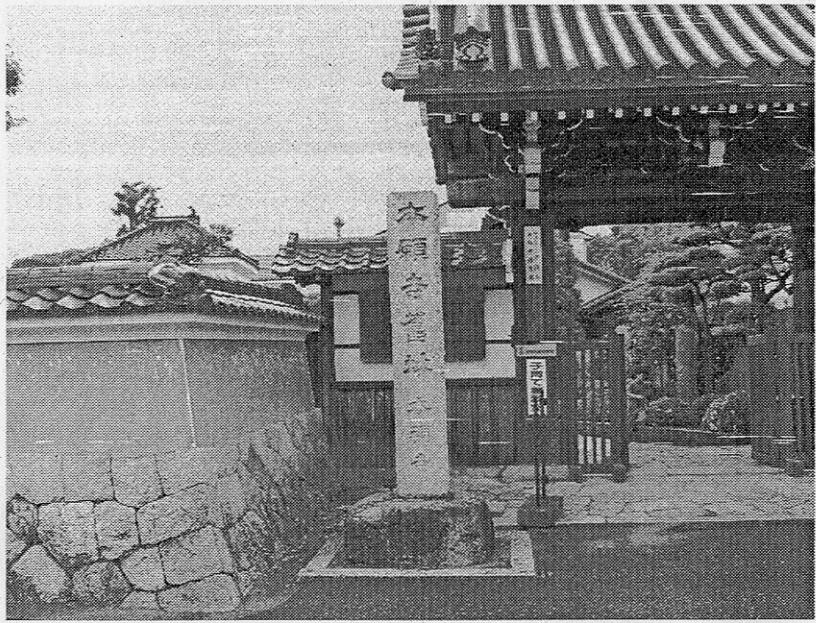
湖上特権が与えられていました。それは上乘と関務と呼ばれる権利です。上乘とは、湖上を通行する船が湖賊に襲われないように、堅田衆が船に乗り込んでその安全をはかったもので、船主は安全に航行するための保証金として、堅田衆に謝礼を支払っていました。関務とは、琵琶湖を通航する船から山門が通行税を取るために堅田の地に関所を設け、堅田衆に湖上関の管理の

実務を請け負わせていたことをいいます。

この権利を有する階層は殿原衆と呼ばれ、臨済宗に帰依した地侍衆で形成されています。それに対して、真宗に帰依した全人衆と呼ばれる一般農民や商工業者からなる階層があり、殿原衆より一段低い身分で上乘権を持ってない住人でした。彼らは、真宗を通じて本福寺を中心に結束を固め、次第に勢力をのばしていききました。

堅田における真宗教団の発展は、本福寺善道の布教から始まりました。孫の法住は、長禄4（1460）年2月、蓮如から十字名号を本尊として下付され、また、親鸞と蓮如の連座像も寛正年間（1460-66年）に下付され、

堅田衆と真宗



本福寺

に命じて堅田を討たせたものでした。沖島に落ち延びた堅田衆は、文明2（1470）年に至って延暦寺に莫大な「礼銭・礼物」を支払って、堅田へ戻ることができました。その礼銭は殿原衆・全人衆の区別なく負担したため、両者の身分的格差は次第になくなってきました。

このように堅田は、堅田大責という苦難を乗り越えて、惣村としての結束を強固なものにし、ルイス・フロイスの言う「甚だ富裕なる堅田と称する町」として成長していききました。

蓮如門下として認められるようになり、発展を続けていきます。

田大責」と言われるほど激しいもので、堅田の街は全焼しました。この発展は、足利幕府の「花の御所」の用材運搬船を堅田衆が襲撃したことにより、怒った幕府が延暦寺

しかし、応仁2（1466）年に堅田門徒は山門から攻撃を受けます。これは「堅

幕府の「花の御所」の用材運搬船を堅田衆が襲撃したこと

本福寺を中心に結束、発展

と二分され、堅田の繁栄は終りを告げます。

（滋賀県埋蔵文化財センター 三宅 弘）